時空跳躍隊２０２５!!

佐野和敏

【登場人物】

倉重美紀（くらしげみき）
博士（久遠梨花・くおんりか）
助手１（常盤煌・ときわこう）
助手２（桐生葵・きりゅうあおい）
Ｎ１（ナレーション１）
Ｎ２（ナレーション２）
Ｎ３（ナレーション３）
生徒①
生徒②
生徒③
校長（田中一仁・たなかいちじん）

※　ナレーション役が生徒役を兼ねるなど、人数調整が可能である。
※　男女比などは、演出によって調整が可能である。
※　助手１役は、男性でも女性でも可能である。

1

ナレーション（N1、2、3）が登場する。

N1　「西暦二三〇〇年、人類は地球と共に幾多もの危機を乗り越え大きな成長を遂げていた」

N2　「不必要なものは衰退し、新たなるテクノロジーを取り入れていた……進化したのである」

N3　「しかし、そんな最先端テクノロジーの進化より、いかにして地球が進化してきたのか……」

N1　「そして、人類はこれまでの地球の危機をどうやって乗り越えてきたのか……」

N2　「それを調査・研究している特殊チームがある」

N3　「そのチームの名は！」

N1 2 3「（格好良く洒落た外国人風な雰囲気で）『チーム！時空・跳・躍！』」

と、言いながら、ナレーションが後ろ向きになると、背中に、「時空跳躍」の文字が書いてある。

N1・2・3「隊、隊、隊、隊……（余韻を残すように）」

隊、隊、隊……を言いながら、正面に向き直ると、胸に「隊」の文字が貼り付けられている。

N3　「彼らは今日もまた新たなる発見のために、時空の狭間で歴史の痕跡を追い続けている」

N1・2・3が退場する。

暗く静まり返った中、時空跳躍隊の探照灯が、幾筋も空を縫うように、交わり、ほどけ、交差している。声が聞こえる。

助手1　「博士～……な～んにも見つかりそうな気配ないっすけどねぇ」

助手2　「ここじゃないんじゃないですかねぇ」

助手1　「さっきから小っちゃな石ころばっかりですよ」

助手2　「特にいつもと変わり映えしないっすけどねえ……」

博士　「そんなこと言わないで、もう少し頑張りましょう」

助手1・2「（やる気がない）は～い」

N1・2・3が登場する。

N1　「博士たちは、なかなか思うようなものを見つけることが出来ない」
N2　「時間だけが容赦なく過ぎて行く」
N3　「と、突然、助手たちの目の前に大きな空間が広がった！」

N1、2、3が退場する。
助手1・常盤煌（ときわこう）、助手2・桐生葵（きりゅうあおい）が現れる。

助手1・2「博士！！」
博士　「な～に？」
助手2　「こっちに来てください！」

博士・久遠梨花（くおんりか）が現れる。

博士　「どうしたの！」
助手1　「これを見てください！」
助手2　「なんですかね～、これ……」
博士　「……（周りを見て確認する）やった……見つけた……」

助手２　「で、時に、これは……なんすか？」
助手１　「バカ！見ればわかるだろ！」
助手２　「お前、分かるの？」
助手１　「どう見たって部屋の中だろ！」
助手２　「バ～カ！そんなの、俺だって見れば分かるよ……そうじゃなくて、（ピアノを指し）これが何かを聞いてるんだよ」
助手１　「これか！？……これは……ん～……なんすかね？」
博士　「もう、バカねえ！これは、『クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ』よ……」
助手１　「クラ……クラヴィ……？」
助手２　「エフォ……エフォル……？」
博士　「もう！ピアノでしょ！」
助手１・２「ピアノ！」
博士　「そうよ！」
助手１　「その……『クラヴィ……』なんとか、って言う名前はなんすか？」
博士　「ピアノの正式名称よ」
助手２　「正式名称って、あるんだあ！」
助手１　「（感心して）う～ん！しかも、結構長いんですね、（助手２に）なあ」
助手２　「うん。我々の知っているピアノって言ったら、（目の前の空中を指し）ここに、こう……スペース・キーボードが現れてですね、誰でも簡単に演奏で

きるモノなんですよ」

助手１　「これは、どうやって演奏するんですか？」

博士　「これは……もう鳴らないと思うけど……この鍵盤を叩いて演奏するのよ（鍵盤を叩く）」

ピアノが鳴る。

驚く助手１、２。

助手１・２「うわー！ビックリした！」

博士　「鳴るじゃない！」

博士が演奏を始める。

助手１　「博士、弾けるんですか？」

博士　「少しね（演奏を続ける）」

助手２　「……なんか、心にグッときますねぇ……素敵ですね」

助手１　「そもそもなんでこんなとこにピアノがあるんですかねえ？」

博士　「そうよ！それを調査しなきゃだわ！ねえ、周りの様子を確認して」

助手１・２「はい（調査する）」

助手２　「博士、こっちには、（シンバルを指し）こんなもんがあります」

博士　「シンバルね」
助手２　「（ピンとこない）はあ……シンバル……」
博士　「昔の楽器よ」
助手２　「なんか昔の楽器はよく分からないっスね」
助手１　「博士、こっちを見てください。いろいろなモノが置いてあります」
博士　「ここは……音楽室みたい……」
助手１　「音楽室ですか……なんか我々の知っている音楽室と随分違いますね」
博士　「……ここは、学校じゃないかしら……昔は……子供達はみんな学校で学んでいたのよ……」
助手１・２「へえ！」
博士　「……ということは、他にも教室があるはず」
助手２　「教室……？」
助手１　「博士、ドアがありますけど……」
博士　「そこから出て、他の部屋も調査して」
助手２　「はい（部屋から出ていく）」

博士、助手１は、音楽室を調査している。
すると、突然、助手２の絶叫が聞こえる。

助手２の声「ヒェ～！ギャ～！！」

博士　「大丈夫？！」

博士と助手Ｉが、慌てて音楽室を飛び出していく。

暗転

２

理科室。

博士、助手Ｉが勢い入ってくる。

博士　「大丈夫！」

助手Ｉ　「どうした～！」

助手２が、恐れおののいて、うずくまっている。

博士　「どうしたの！？」

助手２　「何かがいます」

助手２が指をさすと、指した先に人影らしきものが見える。
助手１が、ライトを照らすと人体模型が浮かび上がる。

助手１　「（それを見て）うわ～！！ビックリした！」

助手２が、それを見て、後退りすると、後ろに、骸骨の骨格模型があり、それにぶつかる。さらに驚く助手２

助手２　「ヒヤ～～！」

その声に、助手１と博士が驚いて、声を上げる。

博士・助手１「わー！」
博士　「もう！あんたの声にびっくりしたじゃない！」
助手２　「だって……こんなモノがあっちにもこっちにもいるもんですから……」
助手１　「脅かすなよ……ここは、何ですか？」
博士　「理科室ね」
助手１　「理科室とか言われても、我々は良く知らないもんですから……ここは……なにをするところなんですか？」
博士　「理科室は、もちろん勉強もするけど、実験とか観察を行う場所よ」

助手２　「実験！（不気味がり）……オレ、気味悪いから他を調査するよ」
助手１　「ああ！分かる！オレも一緒に行くわ」

助手１、２が出て行く。

博士　「まったく怖がりなんだから……こんなに綺麗に残ってるなんて……素晴らしいわ！」

博士は、人体模型と骸骨の骨格模型を並べる。

博士　「なんて、素敵なの……惚れ惚れするわ……（人体模型に）このフォルム、シルエット、一分の無駄もない、内臓の配置……人類すべての謎解きの答えがここにあるかのよう……まさに神の創造物！ジオメントリー！……精緻に満ちた幾何学構造がこれなのよ……人間は、こんなに綺麗に組み上がっているものなのかと、改めて気付かされる……なにが欠けても、この美のバランスは崩れてしまう……この間に挟まれて眠りにつきたい（間に入ろうとしている）」

そこへ、助手１が顔を出す。

助手１　「博士！……なにやってんすか？」
博士　「（焦る）え！イヤ、別に……なにも……どうしたの？」
助手１　「あっちに来て下さい。大きな空間を見つけました」
博士　「大きな空間……？ＯＫ！行って見ましょう」

助手１と博士が出ていく。

暗転

3

体育館。
助手１に案内されて、博士が舞台上に現れる。
助手２もいる。

助手１　「ここです」
助手２　「博士、ここはなんでしょう？」
博士　「（見回し）ここは……体育館ね」
助手１　「体育館……」

助手２　「こんな大きなとこで、なにやってんですかね？」
博士　「運動したり、発表会をやったり、式典なんかもやったりするのよ……ねえ！これを見て！」

博士が、壇上の上をライトで指し示す。
斜めに崩れかけた卒業証書授与式と書かれた横断幕（横看板）がある。

博士　「……卒業式をやってたのよ」
助手１　「卒業式ですか……」

助手２は、袖幕の奥に入っていく。

助手２　「博士、なんか……こっちに、スイッチが沢山ありますけど……」
博士　「スイッチ……動きそう？」
助手２　「分かりません！やってみますか」
博士　「お願い！でも、そーっとね」
助手１　「なにが起こるか分からないから、気をつけろよ」
助手２　「え～！！（戻ってくる）急に怖いこと言うなよ」
助手１　「だって、スイッチ入れた瞬間にドカン！となるかもしれないだろ」
博士　「大丈夫よ！……たぶん……」

助手２　「たぶんって……たぶんなんすか！？じゃあ、もしかしたらって事も……無きにしも……」
助手１　「（助手２に）今までありがとうな」
助手２　「勝手に殺すな！まだ生きとるがな！（博士に）ねえ！」
博士　「（助手２に）ありがとうね」
助手１　「博士！」
博士　「ちゃんと骨は拾ってあげるから！（助手１に）ねっ！」
助手１　「はい！（助手２に）任せとけ！」

博士と助手１が、後ずさりしながら話している。

助手２　「やめてください！スイッチ入れませんよ！」
博士　「ハハハ、冗談よ、冗談！（戻ってきて）さあ！頑張って行ってきて！この距離なんだから、死ぬときはみんな一緒よ！」
助手２　「確かに！分かりました！（移動する）……入れますよ！」

次々にスイッチを入れる音が聞こえる。
体育館全体の照明が徐々につく。
イスが散らばっている。

博士　「凄いわ……今でも動くんじゃない！」
助手１　「結構、散らばってますね」
助手２　「（戻ってくる）うわー……なんかバラバラなような、まあまあ綺麗なような……複雑な感じですね……博士！あそこ見てください。人っぽくないですか？」
博士　「そうね……人みたいだけど……他に人はいないのに……」
助手１　「博士、これ、見てください！（壇上の机の上を指し）これって、卒業証書じゃないですか？」
助手２　「お前、よく知ってるね、卒業証書とか」
助手１　「そりゃ、見りゃ分かるだろ……卒業証書って書いてあるし」
助手２　「（見る）あ、確かに……博士、日付けが２０２５年３月１日になっていますよ」
博士　「２０２５年……私たちは、２３００年にタイトラベルしたのよね？」
助手１　「はい。そうです。間違いありません」
博士　「２０２５年ということは……２７５年もこのまんまだったという事ね……」
助手２　「そういうことになりますね」
博士　「……まさに、卒業式の真っ最中だったってことかしら……（卒業証書の名前を読みあげる）倉重美紀！」

会場に座っていた人が返事をして動き出す。

美紀　「ハイ！」

驚く、博士、助手１、２。

博士　「うわー」

助手２　「うおー！動いた」

助手１　「喋った！」

博士　「びっくりした～」

助手１　「博士、だんだん、こっちに近づいてきますよ」

助手２　「どうするんですか？」

博士　「どうするもこうするもないでしょ……」

助手１　「あれは……間違いなくあれですよ」

助手２　「ですよ……霊（例）のモノですよ」

博士　「うん……」

美紀が、壇上に上がってくる。

助手１　「ああ！上がってきましたよ」

助手２　「どうするんですか！？」
博士　「どうしよう……話しかけてみるか」
助手１　「ええ！そんなこと！危険なんじゃないですか？」
助手２　「その時代の人に話しかけるのは、禁止させれてるんじゃないんすか」
助手１　「歴史が変わっちゃうとかいうじゃないですか」
博士　「じゃあ、どうするの！？」
助手１　「分かりません！」
博士　「あんたは！？」
助手２　「分かりません！」

美紀が、客席に向かって一礼をする。博士が美紀に話しかける。

博士　「あの！」
美紀　「……」
博士　「美紀さん」
美紀　「ハイ……」
助手１　「（恐る恐る）あなたは、ここでなにをやっているんですか？」

美紀、助手２を見る。

助手２　「（目が合う。ビビる）ああ！イヤ！あのー！いま言ったのは、私じゃなくて、その……（助手Ｉを指して）あちらの方かな……」

助手Ｉ　「（小声で助手２に）バカッ！こっちを指さすな！」

美紀、助手Ｉをジロリと見る。

助手Ｉ　「イヤ、あの……すいません……なんでもないです……」

博士　「美紀さん……ですよね」

美紀　「ハイ」

博士　「いま、なにをしようとしていたんですか？」

美紀　「主張です」

博士　「……主張……？」

美紀　「卒業の主張です」

博士　「卒業の主張……？今日は……卒業式ですよね？卒業式になにかを訴えるんですか？」

美紀　「あなたたちは、誰ですか？」

博士　「私たちは、遺跡の発掘や調査などを研究している者です」

助手Ｉ　「我々は、時空跳躍隊です」

美紀　「時空跳躍隊……？」

博士　「はい、私たちは時空を移動しながら、いろいろな遺跡などを調査してい

る、タイムトラベラーです。私は、久遠梨花（くおんりか）と言います」
助手１「（ややビビっている）私は、博士の助手で、常盤煌（ときわこう）といいます」
助手２「（めちゃビビっている）私も助手で、桐生葵（きりゅうあおい）です」
博士「私達は、西暦２４００年から来ました」
美紀「２４００年から……それって、過去や未来を行ったり来たり出来るって事ですか？」
助手２「（やや気取って）まあ、一応そういうことになりますかね……未来のテクノロジーは、そこまで発達しているとも言えますね」
美紀「じゃあ、私を過去に連れて行ってください！」
助手１「なんで、過去に戻りたいんですか？」
美紀「やり直したい事があるんです」
助手２「やり直したい事？」
美紀「はい……わたしは……わたしたちの卒業式をやりたいんです」
助手１「あの……（周りを指し示し）この様子からすると、卒業式をやっていたように見えますが……」
美紀「いいえ、卒業式は、まだ執り行われてません……これは卒業式の準備中です」
助手２「準備中に何があったんですか？」
美紀「よく分かりません。それを知るためにも、過去に戻る必要があるんです」

博士　「あの……美紀さん……」
美紀　「ハイ」
博士　「言いにくい事なんだけど、実体のない……霊になってしまったあなたは、タイムトラベルすることが出来ないんです」
助手１　「博士、ソウル・レコンダクター……いわゆる、『実体再生装置』は使えないんですか？」
博士　「条件が悪すぎるわ……あれは、ＤＮＡが必要なのよ。この状況で美紀さんのＤＮＡが、２７５年間も残っているとは考えられないわ」
美紀　「２７５年？いまは、何年なんですか？」
助手２　「西暦２３００年です」
美紀　「西暦２３００年……私は、そんなに長く、ここにいるんですね」
助手１　「あなたは……当時の事を、よく覚えてないんですよね」
美紀　「ハイ……いま、名前を呼ばれるまで、私は眠っているだけでした……」
博士　「名前を呼ぶことで、霊を目覚めさせてしまったということですか……」
助手２　「博士、ここは、一つ美紀さんの力になってあげてはどうでしょう？」
助手１　「私も、賛成です」
博士　「力になってはあげたいけど……なかなかいい方法が……」
美紀　「あなたたちは、時空を移動できるんですねよね？じゃあ、あなたたちが、もう一度あの日に行って、わたしに危険が迫っている事を教えてください！そうすれば、私は卒業式を迎えられます」

博士　「……すいません、美紀さん、それはできません……美紀さん……私たちは……歴史を変えてしまうようなことをすると……法的に罰を受けることになっています……」

美紀　「私のような、何の変哲もない普通の高校生の数日を変えたって、歴史なんて、なにも変わらないんじゃないでしょうか？」

助手１　「そうですよ。地球規模で考えたら小さなことですよ！全然大したことじゃないじゃないですか？」

助手２　「そうっすよ！なんとかしてあげましょうよ。なにかがあった日よりも少し前に行って、美紀さんに事情を説明すれば、この状況は回避できるんじゃ」

博士　「できません……もし、そんなことをしたら、美紀さんだけの問題じゃなくなるからです。美紀さんに関わっている人たち全ての人生を変えてしまうことになるからです。それは、１人の人生かもしれないし、１００人……イヤ、１０００人の人生かもしれない。もしかしたら、亡くならなくていい人が、亡くならなくてはならなくなるかもしれません。ですから、できないんです」

美紀　「（感情的になり）じゃあ！私はどうすればいいんですか！？私は死んでもいい人間なんですか！このまま永久に霊として彷徨うんですか！？あなたたちは２４００年から来たと言った！私が生きていたのは、２０２５年です！私は！（力なく泣き伏せる）私は……あなたたちが居なくなってしま

ったら……私は彷徨い続けるんですか？」

助手１　「博士、なんとかならないんですか……？」

助手２　「我々が生きているのは、最先端テクノロジーが発達した、２４００年なんですよ。なんか凄いことができる機械とかがあるんじゃないですか？」

博士　「うん……美紀さん、なにか、美紀さんの力になれることを考えます……なにがあったのか、分かる範囲で教えて下さい」

美紀　「はい……私たちの学校では、卒業式の当日、クラスの代表者がそのクラスの最後に卒業証書をもらいます。その時に、卒業生の主張というのをやります。私は学年の代表として、一番最後に主張する担当でした」

助手１　「（ピンときてない）卒業生の主張……ですか」

美紀　「はい……いろいろな思い出や、将来についての思いを訴えるというものです」

助手２　「そういうことですか……」

美紀　「卒業式まで、あと数日という時でした……式の準備をしながら、私は練習していました……その時、突然、大き地震が来たようでした……物音がしたと思うと……気づいたら私はここにいました……」

助手１　「うわ！そりゃ、ないわ……」

助手２　「あっちゃ……それじゃあ、なにがあったか、よく分からないですよね」

美紀　「はい……」

博士　「ねえ、『時の雫』って、持ってきた？」

助手１　「はい、持ってきてます（作業を始める）」
助手２　「時の雫ってなに？洒落た名前だけど」
助手１　「お前知らないのかよ？学生の時に、博士の授業でやったろ？量子エコーモニターのことだろ」
助手２　「量子エコーモニター？」
助手１　「空間に残る、量子の雫を集める装置だよ。それで、少しでもその時の量子が残っていれば……」
助手２　「だから、時の雫か……で、集めてどうするの？」
助手１　「可視化するんだよ」
助手２　「可視化！？」
助手１　「この空間に、その時の様子を映し出すんだよ」
助手２　「ええ！ここに、映せるの！？」
助手１　「うん。お前は、なんにも知らないなあ……」
助手２　「お前、よく知ってるな！さすが、助手の１番手だ！」
助手１　「お前は、授業中寝てばっかりだったから、万年、２番手なんだよ」
博士　「ねえ、どう？イケそう？」
助手１　「はい。イケそうです。行きますよ！それ！（スイッチを押す）」

明転

4

美紀が生きていた頃の体育館になる。
活気があり、いろいろな人が慌ただしく、卒業式の準備をしている。
それを、見ている、博士、助手１、２、美紀。

博士　「これが、まだ美紀さんが地震に遭う前です」
助手１　「（美紀に）なんか、慌ただしいですね」
美紀　「私たちの学校では、卒業式は生徒たち自身が準備をして作り上げていくのが伝統なんです」
助手２　「確かに、その方が感謝の気持ちが大きくなりますよね」

生徒①がインカムで会話しながら登場する。

生徒①　「はい！はい！そうです！それでいいですね！ああ、それから、細かい調整はそちらに任せますので、お願いします」

生徒②がスタンドマイクを持って舞台袖に登場する。

生徒②　「あー。あー。ただいまマイクのテスト中。ただいまマイクのテスト中。調

整室？もう少しマイクのゲイン上げてもらうかな……ＯＫ！ＯＫ！ベリーグッド！最高で～す！」

生徒③が、舞台の下手の階段の下からインカムを持ちながら登場する。舞台上に立つと、スポットライトが点灯し、生徒③を追いかけながら移動する。

生徒③　「キャットウォーク、上手スポットさん！もう少し綺麗に合わせてください。もう一度、行きますよ（戻って再登場する）……今度はいい感じです……（歩きながら）そのまま舞台中央に立つ。卒業証書を渡される。礼して、客席側に体を向ける！そこでキャットウォークの下手スポットを当てる！ハイ、来ました！ＯＫ！バッチシです！」

生徒①が美紀に気づく。

生徒①　「あれ、美紀！ちょうどいいところにいるじゃない！何やってるんだよ。こっち来てよ。ここに立ってよ」

生徒②　「なんだよ、美紀いるなら本人に動いてもらおうよ」

生徒③　「私たち、当日の美紀の動きの確認してたんだから」

美紀　「（当時の美紀に戻る）ごめん、ありがとう！」

生徒①　「よし、じゃあ、動きの段取りを確認しておこうよ！」
生徒③　「ひと通り、各クラスの主張と卒業証書授与が終わる。最後に、美紀の番が来る」
生徒②　「で、担任が名前を呼びあげる。卒業生代表！３年Ｃ組、倉重美紀！」
生徒③　「美紀が返事をする」
美紀　「はい！」
生徒①　「ＯＫ！美紀は、本来、自分の席に座っていて、名前を呼ばれたら、移動してくることになる……けど……いまは、舞台に上がってくる前の階段の下あたりにスタンバイしてもらえばいいかな……」
生徒③　「（立ち位置を指し示す）ここね！」
美紀　「ＯＫ！」
生徒②　「美紀がズンズン歩いて来る！で、（立ち位置を指し示し）そこに立ち止まる」
生徒③　「上手スポットが来る！ハイ、来た！」
生徒①　「ん？……あれ？来ないねえ」
生徒③　「（直に叫ぶ）上手～！どした～！ここでスポットだろ～！ズレてるだろ～！ハイ、集中！気を抜かないように頼むよ～！」
生徒①　「では！改めまして、もう一度いきます！よ～い！アクション！」
生徒②　「ハイ！美紀、来た～！」
生徒③　「上手！ＯＫ！」

生徒①　「美紀、センターへ移動！」
生徒②　「次いくよ～！」
生徒①　「校長からの卒業証書授与がある」
生徒②　「はい、あった！」
生徒①　「美紀、校長に礼！客席に体を向ける！」
生徒②　「この間に、校長はハケる」
生徒③　「下手！（美紀にライトが当たる）来た！ピッタリ！感動！」
生徒②　「美紀、客席に礼！」
美紀　「ＯＫ！（礼をする）」
生徒③　「ここで、スポットアウトする。美紀の上のサスペンションライトがゆっくりとつく……つく……つかないねえ」

大きな地鳴りがする。物音と共に、照明が次々と落ちる音。

暗転

5

廃墟と化した体育館に戻る。

助手１、２が、舞台中央付近、天井部分を調査している。

助手２　「痕跡信号をスキャンします」

博士　「舞台中央で照明が落ちてきたようですね」

美紀　「……一瞬の出来事だったので、なにが起きたからよく分からず……」

博士　「あれだけ、慌ただしいと、なかなか状況を把握できないですね」

美紀　「みんなも、式を盛り上げようと、一丸となっていた時だったので……」

助手１　「博士、解析の結果がでました……落ちてきた照明ですが……一つではなく、続けざまに落ちてきたようですね……」

美紀　「続けざま……？」

助手２　「ハイ、照明バトンと言う、照明をいくつも吊るす事のできる、鉄製の長い棒があるんですが……」

助手１　「それを固定している根元部分が老朽化で折れたようですね。そして、その重みが他の部分にもかかり、耐え切れず、次々に折れて落ちてきたようです」

美紀　「なるほど……そういうことでしたか……事故じゃあ、誰かを恨むわけにもいかないですね」

博士　「恨む……？」

美紀　「私は……今は霊なので……誰かを恨んだ方が霊と報われるのかなと思って……」

助手２　「そんなことないですよ！きっと報われますって！」
助手１　「私もそう思います！卒業式で主張出来れば、報われると思います！ねっ、博士」
博士　「はい。私もそう思います」
助手１　「博士、なんとか美紀さんが主張できるように、環境に整えてあげることは出来ないんですか？」
助手２　「なんか、凄い装置ないっスか！？」
博士　「凄い装置か（困る）……美紀さん、少し時間を貰えませんか……」
美紀　「はい」

暗転

6

同じ場所。
卒業式の準備が整っている。
壇上に倉重美紀卒業式と書かれた横断幕（横看板）が掲げられている。

助手１　「博士、いよいよこの日が来ましたねえ」

博士　「ええ！まさかこんなに早く集められるとは思わなかったわよ」
助手２　「（客席に向かって）みなさ～ん、今日は、ありがとうございます！わざわざ来ていただきまして……ご協力感謝します」
助手１　「博士、美紀さんを呼んできますね」
博士　「うん、お願い」
助手１　「（助手２に）一緒に行こう」
助手２　「うん」

助手１、２が美紀を迎えに行く。

博士　「校長先生、お願いします」
校長　「（登場する）はい……こちらこそ、よろしくお願いします。私も、なかなかこういう事には慣れていないものですから……緊張しますね」
博士　「大丈夫ですよ。こういう事に慣れてる人なんて、そうそういるもんじゃないですから」
助手２　「博士、美紀さんをお連れしました」
博士　「美紀さん、お待たせいたしました。これから、卒業式を始めたいと思います」
美紀　「はい……ありがとうございます……でも……（客席を指し）この方たちは……」

助手１　「この方たちは、当時の卒業生や来賓の子孫の方々です」
美紀　「子孫……？」
助手２　「まあ、一部、そうじゃない方々もいますけどね」
博士　「そういう事は言わないの、皆さん応援したい気持ちで来てくださったんだから」
美紀　「こんなに大勢の人が、時空を移動したということですか？」
助手２　「はい。当時の関係者の子孫を……我々の時代、すなわち、２４００年からここへ連れてきて、ここで卒業式を挙げるのがいいのではないかと考えたわけです」
助手１　「博士が」
博士　「ええ、まあ……」
美紀　「……２０２５年の人の子孫を……２４００年から見つけ出す……ということは……２４００年からすれば……３７５年前のルーツを辿るというとですよね……そんなこと可能なんですか……？」
助手２　「可能だから、こうしてみなさんが揃ったわけです。（客席に呼びかける）ねっ、みなさ～ん！……ほら、みんな、あんなに沢山手を振ってくれてますよ！それに、この歓声も、凄いこと凄いこと！」
助手１　「（客席に向かって）あああ！反応してくださらなくて、大丈夫です！」
美紀　「どうやって、これだけの人を見つけたんですか？」
博士　「西暦２４００年では、先祖や子孫を辿るのは、難しいことではなくなって

いるんです……しかし、家系が途絶えてしまったり、名前が変わったりしてる方もけっこういらっしゃって……」

美紀　「ですよね……３７５年間も、家系を継続していくのも大変ですよね……あの……聞きにくいことなんですけ……私の家族というか子孫はどうなってしまったのでしょうか……？」

助手２　「それなら、心配はいりません。とりあえず、家系は絶えてはいませんから、今のところは」

美紀　「今のところは？……」

博士　「こちらの校長先生が、当時の校長先生の子孫の方です」

校長　「初めまして。よろしくお願いします」

美紀　「……あの、普段はどんなお仕事をされているんですか？」

校長　「私は、いまは、国の研究機関で、研究者として働いてます……」

美紀　「すいません……わざわざ来ていただいて、ありがとうございます」

助手１　「美紀さん、あちらの方々が、当時、クラスの代表として主張を担当した人たちの子孫の方です……中には、いらっしゃらない方もいますが……」

美紀　「……ありがとうございます……（博士たちに）あの時の卒業式は、事故後どうなってしまったのでしょうか？」

助手２　「私たちの調べた記録によると、事故から１週間後に式は執り行われたようです……が……卒業生の主張は行わず、規模を縮小してやったみたいですね」

美紀　「そうでしたか……みんな、一生懸命に練習したのに、発表できないまま終わってしまったしまったんですね……それなのに、私だけが発表したいなんて言ってししまって申し訳ありません」

博士　「そんなことありません。皆さんは、卒業式で主張は出来なかったですが、それ以上に、人生の中でとても大きな主張が出来たようですよ」

美紀　「人生の中で……主張……？」

助手1　「あちらにお座りのA組の大神優斗（おおがみゆうと）さんは、大学の卒業式で、大学生の主張というのを、自ら主催して大ホールでなさったようです」

助手2　「そのお隣りの、B組の崎田奈美（さきたなみ）さんは、デジタル卒業アルバムの中で、主張を動画と文章にして残されています」

助手1　「C組は美紀さんですから……D組の早津渚（はやつなぎさ）さんは、当時流行っていた、動画共有サイトにご自分の主張をアップして、世界に訴えかけました」

助手2　「E組の長田健太郎（おさだけんたろう）さんは……スタジアムDJというお仕事をされていたので、プロポーズの言葉を……場内アナウンスで主張しました」

助手1　「F組の名雲阿左美（なぐもあさみ）さんは……オリンピックを誘致するためのプレゼンを、オンラインで世界中に向けて主張したのです」

美紀　「皆さん、凄い！大活躍ですね！」

博士　「美紀さん！あとはあなただけです！準備してください」
美紀　「はい！」
助手２　「私は校長の介添え役です」
助手１　「担任の先生の家系は、残念ながら途絶えてしまったようなので、私が担任の先生役として、名前を呼びますので」
美紀　「はい。よろしくお願いします」

美紀が舞台を降り、客席の通路に立つ。
校長は、卒業証書を渡す位置にスタンバイする。
助手２は、校長の横で、介添え役としてスタンバイする。
助手１は、下手の舞台下で、呼び出しの先生役になってスタンバイする。
博士は、それぞれの位置の確認をし、袖幕の中に消える。
音楽がかかる。（パッヘルベル・カノン等）

助手１　「それでは、ただいまより２０２５年度、卒業式を執り行います。卒業生代表、３年Ｃ組、倉重美紀」
美紀　「（挙手し）ハイ」

美紀、歩いてきて登壇する。
校長の前に立つ。

校長　「卒業証書。倉重美紀。右の者は、高等学校の課程を全て修了したことを証します。２０２５年３月１日　東京高等学校、校長、田中一仁（たなかいちじん）。おめでとう（証書を渡す）」

美紀　「（受け取る）ありがとうございます！（客席の方に振り返り、礼をする）……みんな～～！！今日は、わざわざ、来てくれて、ありがとう～！私の主張を～、聞いてくださ～い！（ポケットから懐紙風な巻物を出す）私の～、高校での思い出を伝えておきた～い！私の青春は～！体育倉庫でした～！みなさんは～、青春と聞くと何を思い浮かべますか～！部活で流した～、汗でしょうか～！友達との放課後でしょうか～！それとも～高鳴る胸の鼓動と思しき～、恋でしょうか～！私は～、そういう絵にかいたような～、青春らしい青春は～、過ごしてきませんでした～！放課後はすぐに家に帰り～、部活も長くは続かず～、賑やかな輪の中に入るのは～、苦手でした～！そんな私にとって～、とても落ち着ける場所は～、体育倉庫でした～！昼休みに～、一人になりたくなると～、そこに入りました～！そこには～、古いボールの匂いと～、カビ臭いマットの匂い～、そして少しひんやりした～、空気がありました～！小さな暗がりの中で～、心を整える時間が～、私にとって～、ともて大切でした～！あの場所があったから～、私は３年間頑張れたのです～！先生方～、あの場所を～、無くさないでくださ～い！そして、もう一つ～、私を支えてくれたものがありま～

す。それは～、ＡＩで～す！人に言えない悩みも～、将来への不安も～、彼氏ができない悲しみも～、私は全て～、ＡＩに打ち明けました～！ＡＩは～、あなたは～、あなたらしく進めばいいんだよ～と、いつも優しく～、私に声をかけてくれました～！その言葉があったから～、私は少しずつ～、前を向けるようになりました～！生徒会長として～、いつもニコニコしているのは～、全て～、外面（そとづら）で～す！私の３年間は～、皆さんが想像するような～、明るい青春ではありませんでした～！私の３年間は～、体育倉庫の静けさと～、ＡＩのお言葉でした～！これからの人生でも～、私はきっと～、派手ではなく～、ひっそりとしているかもしれません～！それでも、私は～、自分らしい人生を～、選び続けたいと～、思います！！私は～、人の体に興味あるので～、将来は解剖学の道に～、進めたら良いなぁと～、思ってま～す！！……（普通に）本日、このような機会を与えてくださった先生方や保護者の皆様、そして、未来から駆けつけてくださった子孫の方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました～！卒業生代表、３年Ｃ組、倉重美紀」

暗転

7

同じ場所。
卒業式の片づけが始まっている。
卒業式の横断幕（横看板）を元の崩れかけた状態に戻している。

助手2　「せっかく、綺麗にしたんだから、そのままでもいいような気もしますけどねえ」
博士　「そうすると、時代経過に誤差が出て、今後の調査に支障をきたすのよ」
助手1　「（片付けを手伝いながら）時代の変化が分からなくなっちゃったりするからね」
美紀　「（突然、声が聞こえる）みなさん、本当にありがとうございます」
助手2　「良かったですね。無事に思いを届けることができて」
美紀　「これで、やっとゆっくり眠れます」
助手1　「なんか寂しくも感じますが、これが本来あるべき姿なんですよね」
美紀　「そういえば……私の家系は途絶えてないって、言ってましたけど……あれって、どういう……」
助手1　「博士、もう良いんじゃないですか……本当のことを教えてあげても……」
助手2　「そうですよ。今度は、それを知るための怨念で、我々の夢枕に立たれても怖いですし」

博士　「そうね」
助手１　「美紀さん」
美紀　「はい」
助手２　「美紀さんの家系の子孫は……」
助手１　「博士です」
美紀　「（突然、姿を現す）ええ！そうなんですか」

博士、助手１、２が驚く。
「うわ～！出た！」

美紀　「本当ですか？」
博士　「はい。そのようでした……美紀さんの家系は代々女系だったようです。そのため、結婚すると苗字が変わることが多かったので、なかなか気づきませんでしたが……私で、７代目のようです」

助手２が助手１を連れて、離れたとこに移動する。

助手２　「……そういえば……なんで、博士と美紀さんの繋がりが、分かりにくかったの？」
助手１　「そりゃお前、博士も結婚して、苗字が変わっているから、美紀さんにまで

たどり着くのに、時間がかかったってことだろ」
助手2「ふ～ん、なるほど……ええ！ええ！！博士って結婚してんの！？」
助手1「そうだよ。何言ってんだよ、いまさら。行くぞ」
助手2「いやー、ショック……そうか……結婚してんのか……」
助手1「お前、博士の助手、何年やってるんだよ」
助手2「えぇ……3年かな……ああ……でも、なんかショック……オレ、助手辞めようかな……」
助手1「なに訳の分からないこと言ってんだよ。もう行くぞ。博士、今回の出来事をイベント・クロニクル・システムで、時系列ごとに記録データにするので、先に行ってますね」
博士「うん。お願いね」
助手1「はい。美紀さん、じゃあ、これで」
助手2「失礼します」
美紀「はい。ありがとうございました」

助手1、2が退場する。

博士「なにか……導かれたような……不思議なご縁でしたね……」
美紀「はい……いろいろとありがとうございました」
博士「ゆっくり休んでください、御先祖様。家系が絶えないように頑張ります」

美紀　「よろしくお願いします……これで、私は、充分に報われる気がします……
　　おやすみなさい（消える）」
博士　「安らかに……おやすみなさい」

――幕――